

# 有限会社松葉ピッグファーム

※2016年3月現在

代表者名	松葉 幸道	資本金	3百万円
設立年	1997年1月1日	売上高	380百万円(2015年4月期)
事業内容	生産(養豚)、消費者直売、 加工・製造(ハンバーグ等)、 観光・交流	経営規模	田1.55ha、施設950㎡、加工場 200㎡、直売所3.5㎡、畜舎 5,000㎡、母豚260頭
従事者数	16人(うち女性10人。女性内訳:役員1人、一般職1人、常勤パート8人)		
女性活躍支援	[女性に配慮して取組んでいる制度] 短時間勤務制度 [女性に配慮して取組んだ環境整備] 施設設備関係(休憩室・屋内トイレの設置)、重労働等の業務改善		



## 経営概況

(有)松葉ピッグファームは、豚の繁殖・肥育から精肉・加工及び直売までの一貫経営を行う、1997年に法人化された経営体である。創業は1955年頃で、現在の代表取締役の父が庭先養豚として始めた。1973年に現代表が就農、結婚後は夫婦で3人の子育てをしながら養豚経営に取り組んできた。

「農業経営は自分たちの代で終わり」と考えていたところ、農外就業をしていた息子たちが次々とUターンし、2004年に次男が、2006年には

長男が就農し、養豚経営を選んだ。これにより飼養頭数と雇用を増やして規模拡大し、経営改善にも取り組んできた。2011年に三男が就農したのを機に、母豚を180頭から260頭へ拡大し、現在に至っている。

2007年に建設した自社専用のミートセンターで行う精肉・加工部門は毎年好調に伸び続けているが、この伸びは、女性の活躍に負うところが大きい。女性従業員の発想から生まれたメンチカツ、ハンバーグ、豚肉の味噌漬等が人気商品になった結果、2014年度決算での精肉・加工品の売上は、全体売上の約3割を占めるようになった。

精肉・加工部門の売上が伸び、消費者の反応が直接伝わることから、養豚の生産現場でもモチベーションが上がっている。飼育環境を最適に保って育てる「さくらポーク」のブランド名は、市場で高く評価され、生産部門もまた出荷頭数、売上ともに向上している。小学校や高校生を対象にしたウインナー作りでは、豚を通して「命の大切さ」を伝える食育を行う等、地域貢献にも力を入れている。



## 1. 女性の活躍により経営力が向上

代表取締役の松葉幸道氏と妻で取締役の里美氏は、夫婦で養豚経営に取り組んできたが、生き物相手の仕事は年中無休で、子供たちと過ごす時間もままならず、ましてや宿泊を伴う家族旅行はできなかった。このような経験から2011年、次男の妻の入社を機に家族協定を締結した。協定には、経営におけるモットーや長期目標のほか、育児や介護が必要になった時は家族全員で協力しあうこと、休日・休暇を積極的に取得し、旅行などの余暇にあてること、学習・研修の機会があれば積極的に参加すること等が盛り込まれている。

2007年に精肉・加工部門を立ち上げるにあたり、女性パートを2名雇用した。女性パートは包丁さばきが巧みで即戦力として活躍した。里美氏は精肉・加工商品の配達業務を担当しているが、顧客層は主婦が多いため、配達の際に女性同士のコミュニケーションを通して貴重な意見や要望を吸い上げることができ、固定客の確保や直売の販路拡大につながっている。松葉ピッグファームでは、女性の活躍が経営力の向上に寄与していることから、今後もこれまで以上に女性が働きやすい職場環境づくりを進めていきたいと考えている。

## 2. 地域の子育て女性への貢献

2009年から継続雇用している女性パート従業員を、2015年9月に正社員へと登用した。精肉加工技術と知識を習得・熟練し、その技術を後続のパート従業員へ伝授することができ、新商品開発等にも率先して取り組んでいることなど、欠かせない人材との認識からである。

## 3. 子育て・出産に係る制度

女性従業員が育児や家事と両立して働けるよう、出退勤時間を各自の都合に合わせて自由に設定できる勤務体制を整備している。幼稚園の送迎

や家事を優先した勤務時間設定が可能なため、勤務中は仕事に集中でき、仕事効率も良い。また、短時間勤務や休日出勤も可能で、無理なく長期にわたり仕事を続けることができる。その結果、精肉・加工等の技術や知識も向上し、キャリア形成につながっている。女性従業員は豚肉料理のレシピや新商品開発を行っており、誰もが自由に意見を言える雰囲気を大切にしている。

## 4. 女性が働きやすい環境の整備

休憩室や屋内トイレの設置に加え、2014年度にはミートセンターを新設した際、女性従業員の意見を取り入れたロッカールーム等を設置した。

今後、自社の豚肉を使用した焼き肉レストランと、惣菜加工施設を併設する予定である。女性従業員の意見を取り入れ、女性が働きやすい職場環境を整え、女性従業員を雇用し、6次産業化の取り組みをさらに進めていく。

### 審査委員の声

「休みもなく、子育てと養豚経営の両立に苦勞した経験を、次世代には味合わせない」。松葉里美さんの覚悟が働きやすい職場づくりの原点にある。

コミュニケーション能力・主婦感覚を大事にし、女性従業員が家事と両立できるように出退勤時間を弾力的にしている。2011年には家族経営協定を結び、家族全員で協力し合うことで、休日の修得や地域貢献ができています。就労体制を整備することで年間を通して安定的な養豚経営を行えるようになった。

消費者とコミュニケーションを取るなかで、女性の情報収集力・発想力を発揮することが、事業拡大につながっている。規模の違いはあるものの、同年度の受賞者で同じ養豚業の(有)大畠畜産やセブンフーズ(株)と比較してみると、経営の特徴が見えて興味深い。